『痴漢電車×　去勢電車○』

玉子王子　著

一章　気弱な女の子も一発金的を入れれば俄然余裕が出て、前のめりで玉潰しに来る

　人気のない道。

　ちょうど会社帰りの時間。

　白っぽいジャージとピンクのジーパンの男が足音もなく歩く。

　有馬。

　仕事はフリーター、バイトを掛け持ちして適当に暮らしている。

　バイト先の一つ、コンビニの同僚女性とちょっといい関係だった。しかし今日、仕事が終わるとその女性は店長と一緒に帰っていった。

「フリーターじゃ無理なんだよ」

　すれ違いざまに、店長がそう言っていった。年下だが、オーナーの息子なので店長。

　同僚も、チラリと有馬を見た。見下すような目をしていた気がした。

　——性格も悪いし、見た目がいいわけでもない店長。でも狭いコンビニの中では大きな力を持っている。金持ちの息子でもある。フリーターより、向こうと付き合ったほうがおいしいと女が思うのも当然だろう……それは仕方ない。でも俺がむかつくのは、こういう場合「魅力がある」って設定で、女がなびくってことだ。金や立場の差で振られたのに、なんでそんな風に貶められなくちゃならない？　価値がない男に女がなびくと、いっつもそれだ「魅力がある」さ。二世タレントとかが変な男に引っかかるとマスコミが必死で言うよな「魅力がある」相手だって。本当に魅力がある奴なら、わざわざ言わねえよ……胸糞悪い。

　歩く。

　この道は、彼の家への道ではない。

　だが、お気に入りの道ではある。

　むしゃくしゃしたとき、あるいは単に気が向いたとき、この道を通る。

　この道だけではなく、人通りが少ない、目立たない道を通る。

　人通りが無いのではない、少ないというのがポイントだ。

　有馬の趣味は、痴漢である。

　ＳＮＳでも「痴漢万歳」という、なぜ凍結されないのかわからないようなアカウントをやっている。そこそこフォローもされていた。

　嘘とも本当ともつかない体験談を載せ、似たような痴漢アカウントの中では有名なものの一つ。

　最近では、そういうのに敵対的な相手にも目を付けられ始めていた。

　特に熱心な敵対者は「痴漢は**去勢が当然**と考える女性の会」という、これまた凍結されないのが不思議な攻撃的な名前のアカウント。

　ナノテクノロジーが発達し、玉潰しだろうが竿切断だろうが、薬一個ですぐ治る時代に「去勢」というのは絶望的・絶対的なものではないとはいえ、やはり軽々しく口にできるものではないはずだ。

　そういうアカウントに批判的なリツイートなどをされると有馬も多少玉が縮んだ。

　が、だからアカウントを消したり、方針転換をしたりはしない。

　ブロックし、捨てアカで相手を監視してとりあえず様子見である。

と、有馬が足を止める。

周りを見て、空き地に駆け込む。

ズボンのジッパーを下げる。中からかなりの長物を引き出す。ボロン、と垂れ下がる。平時でも二〇センチぐらいはありそうだった。

まことしやかに囁かれる**変態性欲者は巨根**という説を裏付ける一つの例といえるだろう。

内心、自慢の一物である。

当然のようにズル剥けの先端も巨大で三角というより台形。

腹に力を入れると、根元から圧迫感が上がってくる。先端まで来ると、圧力が緩む。

ジョボジョボと、かなり体から離れた場所から尿が噴き出す。

思わずため息が出る。

——ああ、ションベンはいい……

意味不明なことを考えつつ、肩をがっくりと落として口を開け、だらけ切った姿勢で小便を続ける。

馬鹿にしか見えないが、「これから痴漢をやろう」などと考えている人物なので内面通りのふるまいをしているといえる。

終えると、巨棒をパンツのゴムに挟む。立っても平気な形にしておく。これから痴漢をするのだ。

——デカくて大変だ。並んでションベンしたときに見たけど、店長なんか小指だぞ、こんなもんだぞ、それが金の力で……間違ってる。

痴漢が趣味、というのも相当「間違ってる」と思えるが、そこは考えない有馬だった。

道に戻る、と、後ろから足音。

音で女性とわかる。

耳がいいというより、慣れていた、足音で男女を判断するのに慣れていた。余り人に知られないほうがよさそうなスキルといえる。

さりげなく速度を落とし、携帯で話し出す。

彼女と話しているような形で、少しでも油断させようとする。

立ち止まり話すので、追い越す女性。横目で見る有馬。

三〇ほどの有馬から見ると、一〇も下の二十歳代の女性、佐藤。

美人といえなくもないが、あまり格好に関心を払わない感じで、自分が痴漢に狙われるなど考えてもいないのではないか。だからこういう人気のない道にも入ってくる。

胸はなかなか大きく、あまり揺らさないようになどと考えず歩いているのかブルンブルンと派手に動く。

——おほ、デケエ。もう見てるだけでチ〇ポが……

パンツのゴムを引っ張り、膨れ上がる。先端が胸の辺りまで伸びあがる。

話しつつ、近づく。

触るときには、さすがに電話はやめる。

黙って、抱き着く。

「ひっ！」

「おとなしくしろ！　おほおおお！　おっぱいいいい！」

よろけて掴まってしまいました……的なセリフを言って痴漢以外の別の何かの可能性をわずかでも見せ、相手を混乱させるようなことは全くない有馬だった。

痴漢です、と名乗って触っているに近い。

背後から抱き着き、むにゅんむにゅんと巨乳を持ち上げる。服ごと、指にずっしりと減り込む巨雌肉。

腰を押し付ける。柔らかい尻が股間を刺激する。

「おおおおお」

「な……ううう」

なんですか、などといいたいが、声が出ない女性。

その様子に、にんまりする有馬。

――よし！　痴漢に慣れてない、気が弱い子だった！　見た目からして、そうだと思ってた！　だから安心して狙いました！　これはもらったな！　叫ばれたりしたら、面倒だからな。

もみんもみん、巨乳を持ち上げ、左右に分けたり前に引っ張る。

痴漢ながら、強姦にまではいかない、そこまではしたことがない有馬。

――レ〇プまでやっちゃ、人間おしまいだからな。レ〇プは男の権利、とかいう奴らもネット上にはいて……っていうかそういうこと言って活動してるクソもいるらしい。最低だよ。その点俺は痴漢だけ、合法。

考えつつ、指で乳首の位置を探る根っからの犯罪者であるところの痴漢男。

震える女性。

——な、なにこの人、痴漢？　痴漢？　っていうか、これからどうなるの？　お、お尻に何か……押し付けてる。大きい……これおチンチ〇なの？　彼氏のと全然違う……いや！　変態は大きいって本当なんだ！　気持ち悪い！　気持ち悪い！　キ〇タマ抜いてほしい、こんな変態犯罪者！　誰か助けて……

視界がにじむ、涙がこぼれる。

周りを見るが、誰もいない。

自分しかいない。

有馬は痴漢で済ませる気だが、女性、佐藤はそんなことは知らない。

——お、犯される！？　それだけで済むならまだしも、ばれないように、こ、殺され……嫌、誰か……誰もいない、自分で何とかしないと。でもどうやって……あ、そうだ……

思い出す佐藤。

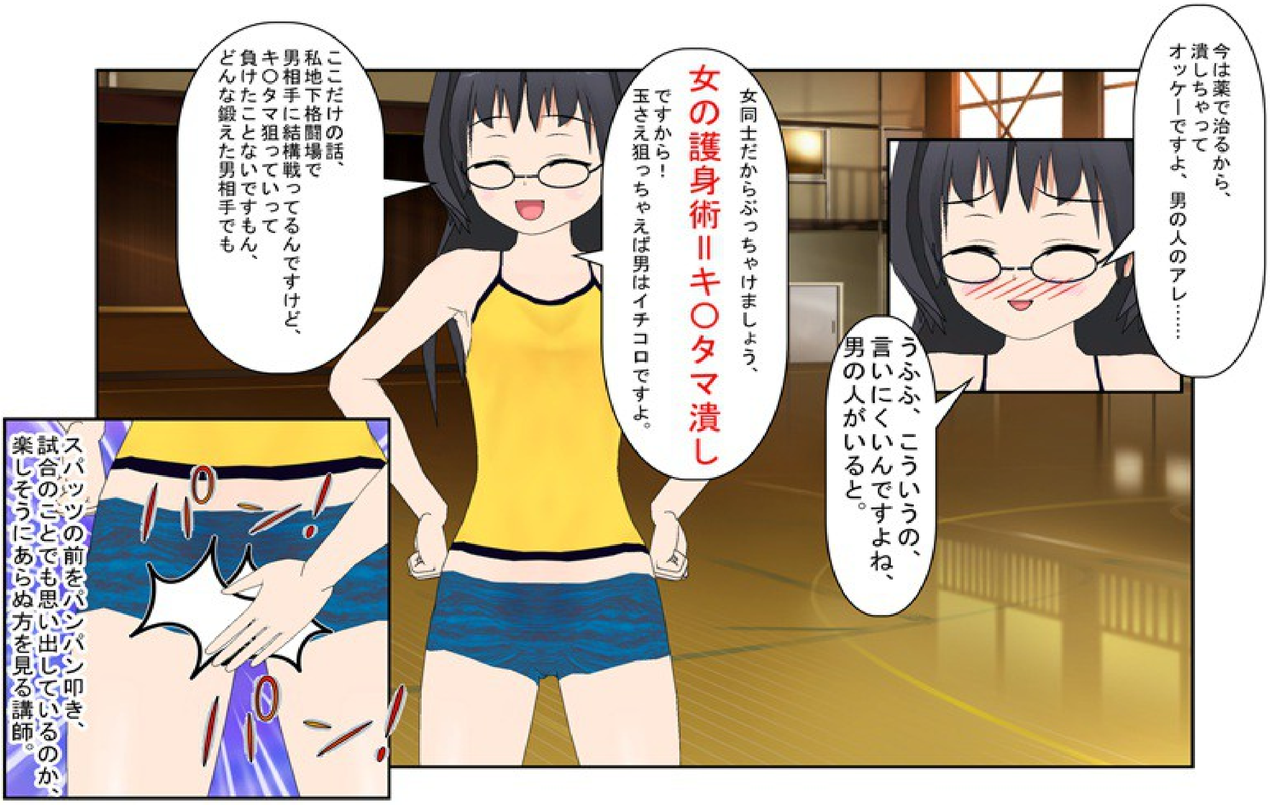
会社は女性社員ばかりなので、熱心に護身術の練習などしていた。

「女性ばかり相手だから教えやすいですよ」

そう、女性講師が楽し気に教えてくれた技は、ほぼ全部**男の特定部位を狙うもの**だった。

「今は薬で治るから、潰しちゃってオッケーですよ、男の人のアレ……うふふ、こういうの、言いにくいんですよね、男の人がいると。女同士だからぶっちゃけましょう、**女の護身術＝キ〇タマ潰し**ですから！　玉さえ狙っちゃえば男はイチコロですよ。ここだけの話、私地下格闘場で男相手に結構戦ってるんですけど、キ〇タマ狙っていって負けたことないですもん、どんな鍛えた男相手でも」

スパッツの前をパンパン叩き、試合のことでも思い出しているのか、楽しそうにあらぬ方を見る講師。



　その姿を思い出すと、極限状況ながら少し笑ってしまう佐藤。

　――そうそう、玉潰し。玉潰し。遠慮なくキ〇タマ潰していいのよ。治るんだから。治らないならいくら痴漢相手でも……潰すのはあれだけど、治るなら平気よ。むしろ潰してやりたいわ！

　ごく普通の優しい女性にとって「潰れたら一生そのまま」というのは相当な重圧だ。いくらついていないとはいえ、重要性はわかる。

　しかし「治るよ」といわれれば、「ならいいか」となる。ついていないだけに、「潰れた時の痛み、屈辱」にはとことん無頓着である。

「オッパイもみもみー、どうしたの？　動かないじゃん。あ、気持ちよくなってきた？」

「……」

　――こういうふうに後ろから抱き着かれたら……腰を横にずらして掌を思いっきり後ろに振る。

　パン、といい音を立てて、佐藤の掌が有馬の股間を掬い上げる。グニュ、とこちらも大きめの鶏卵サイズの巨玉を的確に押し潰す。

「おごっ」

「うっ」

　ぎゅ、と痛みに反応して乳房を握り締める有馬に、眉をしかめる佐藤。

　唇を噛み、眉を吊り上げる。

「痛いわねえ」

「ちょ、痛いのはこっち……あ」

　実際のところ、二人の痛みを比べれば一〇〇〇倍ぐらいは違うだろう。

　さほど思いきりいったわけでもない、どうあがいても潰れるほどの事もない掌底だった。

　それでも、有馬は膝が震えそうなほどの痛みを感じ、汗を噴出させ始めていた。

　が、だからどうという事もない佐藤。

　というかまだ気づいていない、すでに八割がた有馬が無力化されていることに。

「後ろから抱き着かれたら、腰をずらして掌底で玉を掬い上げ……」

　いいつつ、握る。

　有馬の睾丸を握り潰す、佐藤の華奢な女の手。

「あ、やめ……」

「**男の急所を握り潰す！**」

「ちょ……ごおおおお！」

　グリ、ゴリ、グチ、有馬の耳の奥で、聞きたくない肉の悲鳴が響く。

　非力な女性とはいえ成人の力。

　しかし成人しているとはいえ、女性の力。

　女性の手がズボンパンツ越しに陰嚢にめり込む。

　ぎゅううううう、と締め付け、疲れては緩め、また思いきり握り潰す。

「潰れろ潰れろ、キ〇タマ潰れろ！　キ〇タマ潰れろ、二個とも潰れろおおおお！」

「んぎいいいいいい！　やめておねがいいいい！」

　叫びつつ、必死で反撃の手を考える有馬。

人間は攻撃されると、同じことをし返そうとする。

無意識に乳房から手を放し、それを下げる。

大股開きで、思いきり玉握り潰しを仕掛けてくる隙だらけの佐藤。

その柔らかいズボンの股間に手がいく。

ぎゅ、と股間を握る。大人の男の力で思いきり。

握り込む、握りしめる。

一瞬びくりと体をこわばらせる佐藤だが、必死の反撃なのだと気づくと噴き出す。

——うわ、こいつ攻撃してきてるつもりだよ！　あは、バッカじゃない？　確かにこっちは股間をニギンニギンして、あんた死にそうなのかもしれないよ？　でも同じことし返しても仕方ないでしょ、だってこっちは女の子様よ？　クソ情けない急所なんかそこにぶら下げてない上級国民様よ？

「……あはっ、痴漢再開かと思っちゃったよ。それ、攻撃なんだ？」

「ぐうううう う、このおおおおお」

必死でズボンの前を握り締める。女の肉を掴み、柔らかなそれを圧縮しようとする。

頬を緩める佐藤。

「あはは、いたーい。お返しだよ。ぎゅっぎゅっと」

「ひぐううううう！」

　有馬よりはるかにわずかな力で握り返す佐藤。掌で圧縮したり、指で突き刺すように玉を痛めつける。

　うねうねと細い女の指が睾丸を撫で回し、締め、突き刺し、押し潰す。

　鬼の形相でつま先立ちになり、舌を突き出す有馬。

　前にいるので顔は見えないが、動きはなんとなくわかる佐藤。

「あはははははは！　なになに、すっごいやばい感じね！　おキ〇タマ潰れそう？　ほらほら、頑張って握り返しなよ、ほら、ほらー。あは、でもそこ握られても私、全然平気だけどねー、だって女の子様だもんね。だっせーおキンキンぶら下げてない完璧な股間の持ち主。お、握ってる握ってる」

「ぐおおおおお」

「んん、もう力入らなくなってきたね……タマタマもう限界かな？　助けてほしい？」

「た、助けて……」

　だらりと、有馬の両手が垂れ下がる。

「あははは、マジ限界なんだ。玉握りも疲れたし、もう許してあげるよ」

　離して、振り返る。

　そして膝を跳ね上げる。がら空きの有馬の股間に。

　グニュ、と小ぶりな膝がしらに肉の感触。

「おぐっ！」

　目を見開く有馬。

　信じられない、という顔をしているが夜道なのでよくわからない。

　というか、そんな事まったく気にしない佐藤。

　股間を抑え、叫ぶ。

「あぎいいいいい！　金ちゃんんん！　助けてくれるって言ったのに、おキ〇タマ蹴り上げられたああ！　ひどいのお！」

　真青で腰を引き青ざめる有馬に、これ見よがしに嘲笑する佐藤。股間を押さえ、大げさに痛がって見せる。

「ぎゃははは、面白いわ！　私は絶対こうはならないと思いながら、痛がってみせるのはクッソ気分いいわねえ」

「こ、この……」

「んー？　なにかなあ？　文句ある？　もう一回二回三回四回五回キ〇タマ蹴られる？」

「いや、何の文句もありませんけど」

「そう、ならいいよ。それじゃ……ん、普通の顔ねえ」

「あ」

　夜道だが、まじまじ見れば顔の形位わかる。何もつけていないのは全く油断というしかない。

　手を振りかぶる佐藤。

　パン、と平手打ち。

　驚き、ついで屈辱に顔を赤くする有馬。

　しかし間を置かず、パンパンと叩きまくる。

「そらそら、女の子にビンタされてなすがまま、いいの？」

「こ、この……」

　股間を押さえていた手が緩む。

　と、膝蹴り。

　ゴリっと膝金蹴り。

「はぐっ！」

　ブチュ、と鶏卵右玉が破裂。

　握りしめられ、先ほども蹴られたダメージがあった。

　そしてまずい形で当たり、膝と腰骨と挟まれる形になったのだ。

「あおおおおおお！」

「女の子様と喧嘩するときは、男はタ〇キン防御を緩めちゃだめだよ。両手でちゃーんと守らなくちゃ、タ・マ・タ・マ」

　睾丸破裂のあまりの痛みに気が遠くなる有馬。膝が砕ける。

　膝をつき、よろけて倒れ込む。眩暈と吐き気。

　口を開け、意味もなく周りをきょろきょろとみる佐藤。思わぬ援軍が麻酔銃を撃ってきたりはしていない。

「わ、ウッソ、マジで私の蹴りで、こんな男の人が？　やだあ、タマタマってホント弱点なんだ」

「んぐううううううう、か、片金……」

「か、片金って！　ぎゃははは、あ、そうか、片っぽ潰れた？　大丈夫、薬あるから」

「も、もう許して……」

「うふふ、痴漢とおキ〇タマ一つ……治らない時代なら、これは重過ぎる罰だよね」

「そ、そう」

「でも、治る時代なら痴漢一回につき**おキ〇タマ五〇〇個は潰されて当然**じゃない？」

「多すぎるうううう！」

　立ち上がって逃げようとするが、片金を潰された衝撃で腰が痺れて立てない。

　潰された、というより潰れた玉から伝わる痛みが問題だった。

　佐藤が持っているナノマシン入りの薬でさっさと玉を治してやれば、よろけつつも立ち上がれるぐらいにはすぐに回復するが、潰れたままだとろくに動けない。

　這って逃げようとする。

　足を捕まえる佐藤。

　開かせる。

　脇に抱える。

「ほらほら、腕立て」

「ひいいいい、あぐああっ！」

　ポン、と軽く蹴る。全く無防備の股間を。片金が潰れ、巨玉巨マラが縮み上がった股間を。

「がぎいいいいいい！」

　潰れた玉への蹴りは、あまりにも過酷。

涎を飛ばし、涙と鼻水を垂れ流しながら叫ぶ有馬。

死んだほうが絶対楽だよなあ、と頭のどこかで思ってしまうほどの苦痛に震える有馬。

こんなことをしてくるなんで、どれだけドＳなんだ、と恐怖を感じる。

しかし佐藤にそういう感覚はない。潰れていない方を軽く蹴っただけのつもりだ。潰れたほうへの攻撃にもなっていることには気づいていない。「潰れた」というのを、ある種の消滅と捉えていた。女性であるという絶対優位からくる睾丸への無関心だろう。

「あははは、大げさねえ！　ほら、腕立てよ！」

「や、やりますううう！」

必死で両手を地面につき、体を持ち上げる。

度重なる急所責めと片金破裂、そして破裂した玉を放置され、今また蹴られた。

そんな状態で力が出るほうがおかしいが、必死で上体を持ち上げる。

「ブルブル震えてる！　男なんだからもっと頑張って力だしなよ！」

「は、はいいいい」

上げる、下げる、上げる……上げられず、突っ伏す。

力尽きた。

――もう駄目だ……「もう無理なんだ？　だっさー」とか言われるんだろうな……

そうはならなかった。

力尽きた一瞬後、ごく普通にパン、と金蹴り。

ビグン、という感じで命を削るような仰け反り方を見せる有馬。

「ふんぐあああああぎゃあああああああ！」

「こらっ！　そんなんで金メダル取れるの？！　むしろ剥奪してやろうか、残り一個！」

「や、やめて！　やりますう！」

泡を吹きながら腕立てと金蹴り。

佐藤もドＳ女子の割合世界一のうさぎ県女子として当然ながらドＳで、蹴るたびに何か体の中に熱いものを感じる。

徐々に蹴りに入る力もエスカレート、ついには残りの玉を蹴り潰す。

つま先を思いきり蹴り込んだところ、うまく楕円形の睾丸の真ん中あたりをとらえたのだ。

両睾丸を破壊され、完全去勢される有馬。

男としての人生はその時点で終了、セックスも不能、子孫も残せなくなる。

悲惨の一言である。

ぐったりし、痙攣する有馬。

限界の振りかな、と怪しんでパンパンと股間をさらに蹴りまくる佐藤。

だが、反応しないことでやっと二個玉死亡と判断する。

手を放し、飛び上がる。

「きゃああああ！　これ、潰れたの？　残りの片玉も？　おキンキンの残り片っ方も？　潰れた？　ダブルゴールドデッド？　ぎゃはははは！　玉無しだ玉無し！　痴漢にはお似合いよね！」

笑い、手を叩く。

しかし、懐から瓶を取り出し、有馬の口に押し込んでやる。

　ナノメカがすぐに働きだし、あっという間に……それこそ一〇秒ほどで睾丸を二個とも再生させる。

　膨れ上がっていた肉袋も治り、何の問題もない、完全な健康体に戻る。

　白目を剥き、痙攣していた有馬だが、玉が治ったので普通の気絶状態になる。

　蹴り付けるなりすればすぐに目も覚めるが、仕事で疲れていた佐藤は一度去勢したことで満足し、有馬を転がしたままその場を後にする。

　玉は治してやったんだから大丈夫だろう、という判断。

　確かにまあ大丈夫なのだが、本当に痛みとかダメージには関心がないことがわかる振る舞いだった。

　まあ痴漢相手なのだから当然かもしれない。

　数時間後、やっと目を覚ます有馬。

「ん……おおおおおおっ、玉……玉ああああ」

　怪我は完全に治るが、痛みはそのままなのがこの時代のナノメカの限界だ。

　何とか体を起こしつつ、股間を押さえて悶える。

　潰されてから数時間経っているが、まだ歩くのがきつい程度には痛かった。

「ぐううううう、く、クソマ〇コが……たかが痴漢ぐらいで玉潰しなんて……」

「え、おっさん痴漢なんだ」

「え？」

　驚き振り返る。その動きだけで股間に痛みが来る。

「おおっ」

「ぎゃははは、何々？　痴漢やって、タ〇キン潰されて、まだ痛いんだ？　っていうか、もしかしたら現在進行形でタマタマ潰れてる？　玉無し？　キ〇タマないの？　男なのに？」

「ぎゃははは！　男にとっちゃ大事なことなんだから、笑っちゃ悪いって！　タマタマないんですかー？　情けなくないですかー？　男として終わっちゃってるんですかー？　なんてね！」

　ギャル風の派手な色の髪に、付け爪の少女二人。

　有馬の趣味ではない。

　――痴漢なんかしたら反撃されそうだし、あの付け爪ってのがなんか不潔そうで嫌いなんだよ。

　痴漢にそういうことを言う資格は一切ないと思える。まあ言っていないが。

　黙って踵を返そうとする有馬。

　その肩を引くギャル少女。

「ちょっとまってよ、痴漢の話だけどさ」

　ギャルでめんどくさそうだが、痴漢にあわないというわけでもない。

　ニコニコしているが、内心は友好的とはいいがたかった。

　ギャルの片方、東雲という少女がチラリと有馬の股間を見る。

　――こんなひとけが無いところで痴漢野郎と会えたのはラッキーだよ。前の被害者に玉やられて弱ってる感じだし、女の敵に、更なる玉潰しやってやんよ。基本、キンキン責め好きだし。

　チラ、ともう一人のギャルと目を合わせる。右手の指で丸を作り、左手の拳で叩いて笑う。

　玉責めやってやろう、というジェスチャーだった。

体験版終わり

この後ギャルたちにみっちり玉潰し。

去勢でなぜか立ってしまった巨柱を逆レイプして食い散らかしていく性に貪欲なギャルたち。

金責め逆レイプの上にボロ雑巾のように放置されたことで心折れ、痴漢はやめようと誓う有馬だったが、ファンの女子に痴漢プレーに誘われ、あっさり撤回。

とりあえず誘われるままに電車に乗るが、罠だった。

乗っていた女たち全員が有馬の睾丸を狙う。

逃げ場はなく、金責めで追い込まれ、玉を潰されては再生され、延々玉潰しの有馬……

というような内容になります。

ぜひ製品版をお楽しみください。